

## 2009年1月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

アラスカ湾でリッジが発達し、北米大陸、北大西洋、ユーラシア大陸へと準定常ロスビー波束の伝播が見られ、500 hPa 高度では対応する波列状の偏差が明瞭に見られた。これらの位相は1月を通してほぼ固定していた。また、オホーツク海周辺でもリッジが発達し、北日本を中心として明瞭な高温偏差となった。トラフが発達した北米東部や西ヨーロッパでは低温偏差が見られた。海面更正気圧を見ると、シベリア高気圧は平年よりやや強かった一方、アリューシャン低気圧は平年より弱かった。北半球の亜熱帯ジェットは、北アフリカから東アジアにかけては準定常ロスビー波束の伝播に対応して蛇行した。北太平洋のストームトラック域における高周波擾乱の活動は、日付変更線付近で平年より強く、北大西洋のストームトラック域では東部で平年より強かった。北半球の成層圏では東西波数2の循環が卓越し、大規模昇温が発生した。南半球では、1月下旬にオーストラリア南東部でリッジが発達し、異常高温の原因の一つとなった。

熱帯域の対流活動は、南シナ海からフィリピン付近で平年よりも活発だった。ここでは、南に張り出したシベリア高気圧からの寒気の吹き出しに伴い対流活動が活発化し、対流圏下層では低気圧性循環偏差が持続した。またオーストラリア北部およびコロンビア周辺でも対流活動が活発だった。一方、西・中部太平洋赤道域では平年よりも不活発だった。これらの対流活動偏差に対応して、中部太平洋赤道域では対流圏上層の西風偏差と下層の東風偏差が持続したが、2008年12月に比べると弱化した。熱帯域の海面更正気圧は、インドネシア周辺で低気圧偏差、太平洋域で高気圧偏差となり、南方振動指数 (SOI) の値は+0.8だった。赤道季節内変動に伴う対流活動が活発な領域は中旬以降明瞭になり、南米からインド洋へと東進した。

道域では平年よりも不活発だった。これらの対流活動偏差に対応して、中部太平洋赤道域では対流圏上層の西風偏差と下層の東風偏差が持続したが、2008年12月に比べると弱化した。熱帯域の海面更正気圧は、インドネシア周辺で低気圧偏差、太平洋域で高気圧偏差となり、南方振動指数 (SOI) の値は+0.8だった。赤道季節内変動に伴う対流活動が活発な領域は中旬以降明瞭になり、南米からインド洋へと東進した。

### 世界の天候

2009年1月の世界の月平均気温平年差は、+0.21°Cであった。1月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は0.72°C/100年である。

○東南アジアからオーストラリア北部では、対流活動が平年より活発だった影響で異常多雨となった。

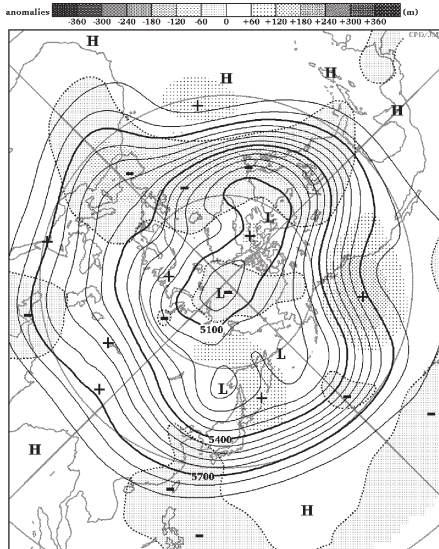
○ヨーロッパ南東部からアルジェリアでは、低気圧や前線の影響で異常多雨となった。

○ブラジル北東部からアルゼンチンでは異常少雨となった。

(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

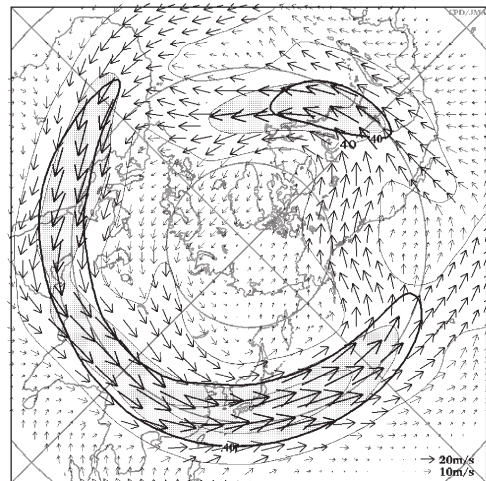
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



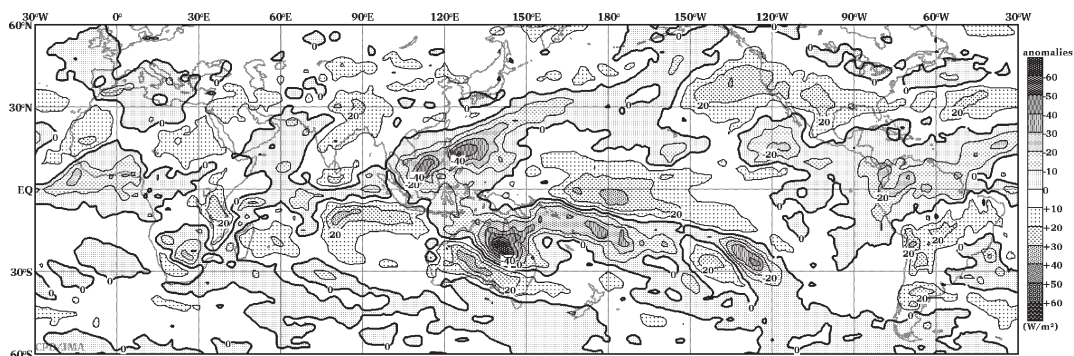
2009年1月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差

等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1979~2004年のデータから作成。

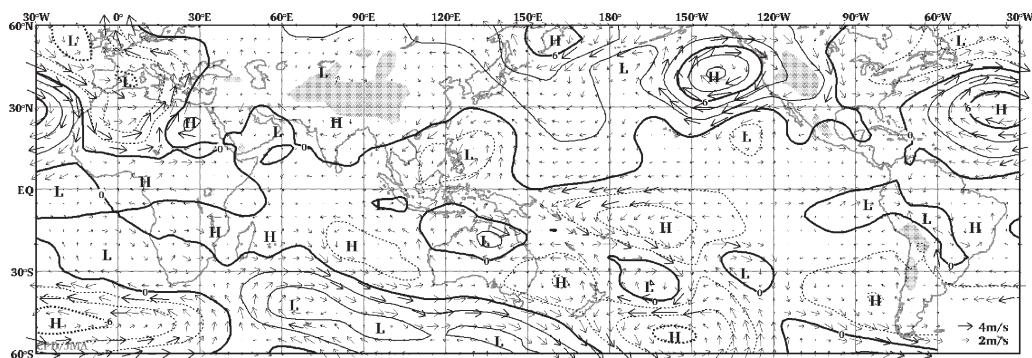


2009年1月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル

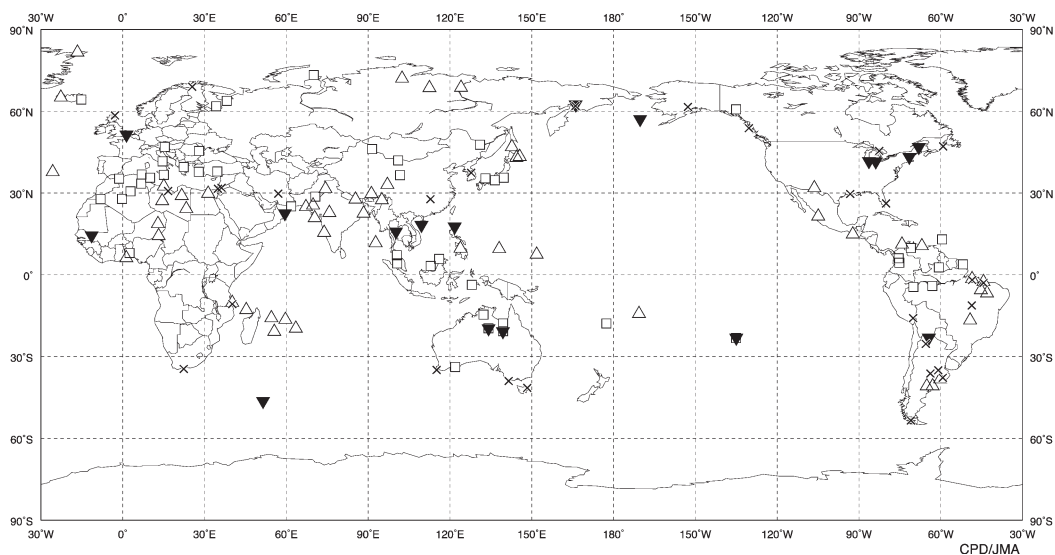
等値線間隔は20 m/s。陰影部は40 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の40 m/s以上の領域を示す。平年値は1979~2004年のデータから作成。



2009年1月の月平均外向き長波放射量年偏差  
 等値線間隔は10 W/m<sup>2</sup>で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データは NOAA。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2009年1月の月平均850 hPa 流線関数年偏差および風年偏差ベクトル  
 流線関数の偏差の等値線間隔は  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2009年1月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。